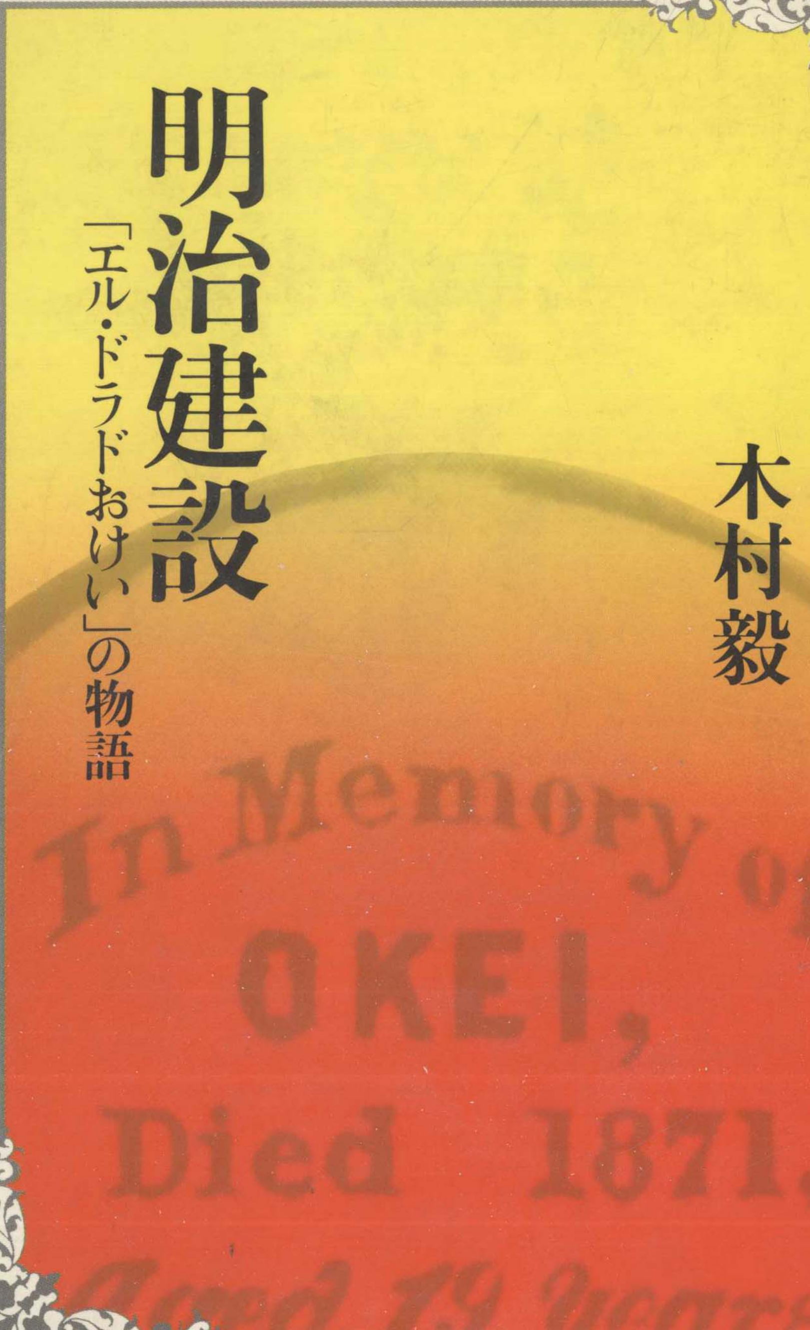
明治建設

「エル・ドラドおけい」の物語

木村毅



明治建設

「エル・ドラドおけい」の物語

木村毅

恒文社

木 村　　毅（きむら　き）

明治文化研究会会員
早稲田大学百年史編集委員
文学博士
元神戸松蔭女子学院大学教授

©1981

明治建設　　定価 1,800円
——「エル・ドラドおけいの物語」——

1981年1月31日　第1版第1刷発行

著　者　木 村　　毅
発行者　池 田　恒 雄

発行所　株式会社 **恒 文 社**
東京都千代田区神田錦町3－3
〒101　TEL03(291)7901
振替口座（東京）5—35824

0093—007059—2273　印刷・鈴木整版　製本・飯塚製本
落丁，乱丁本はお取替え致します

序

「明治建設」といえば、あまりに範囲が広い。そこで私は、まず、そのうちから、政治的、軍事的な部面を除こうと考えた。それには、従来いろいろな書物が出ているからである。

その上で、私の第一に着目したのは文化明治の建設である。これには福沢先生が上野の砲声を聞きながら、エーランドの経済書を講義されたという話が、代表的な挿話でなくてはならない。ついで明六雑誌である。

第二に私が狙ったのは、明治において、わが国は、隠者的孤立国の日本から、世界の日本に飛躍しその帝国主義的羽翼を伸ばし得た事である。これは大切な明治の一特相なので、私は、明治二年、北米カリフォルニアに「日本移民地（ジャパニーズ・コロニー）」「ワカマツ・タウン」を建設しようとした一行の事を書いて、その点に触れてみた。

私は、あの事蹟が、この作によって少しでも広く世に知られるようになる事を希望するので、それには当時の新聞記事をそのまま羅列しておいた。今のところそれ以外にはちっともこの材料はないのだし、そしてこれら新聞記事だけでも優に小説にも勝る興味を読者諸君に誘発することを確信している。

女性の認識も、明治年間において、一大飛躍、一大変化をとげたものであった。「おけい」なるヒロインを以て上記の諸材料を縫い綴らせたゆえんである。ただし、このおけいについては、北米旅行中、その墓に詣で、当時おけいを引取った家のヘンリ・フェル・カンプ老人が八十余歳で現存していたので、それからおけいについて親しく聞いた以外の材料が、絶無である。もし、読者にご存知の方があったら、ぜひご一報贈わりたい。

この作は三月十日の夕方から執筆しはじめ、四月十日の午後正四時に擱筆した。ちょうど、満一カ月の慌しさなので、不満が多い。もちろん、それを言いわけにする積りはちっともないのだが、読者からは若干の同情をして読んで貰いたいと思う。

木村　毅

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

明治建設目次

序

明治建設

——「エル・ドラドおけい」の物語

Wayland 経済書……7
上野の砲声……41
慶応から明治へ……69
振袖書生……94
どんたく(Zondag)……129
El Dorado(黄金郷)……173

明六雑誌……209

余談

おけいの事……257

A 米国新聞の記事……257

B おけいの遺跡を探る……264

C 竹田雪城氏の調査……280

D 伊達多仲氏の手紙より……288

スネルの事……293

明治建設

——「エル・ドラドおけい」の物語——

装幀　本田進

Wayland の経済書

一

「おい、いま帰ったよ」
まだ鉋(かんな)の匂の新しい階段に、足音を控えるようにして上がりながら、三十五歳の壮年の福沢諭吉は、二階の室に声を掛けた。そこには懐妊中の錦子夫人が、気分がすぐれなくて、起きたり臥せったりしているのであった。
「お帰りなさいませ」
障子は中から開けられた。夫人はこの時はちょうど折よく、褥を離れて、多少でも気晴しになるかと、茶道具に艶拭巾(つやぶきん)を掛けているところであった。
「加減(かげん)はいいか」
「はい、有難う存じます。お蔭さまで起きていられます」

「そうか、それはよかった、よかった」
「あなたは大そうお手間が取れましたが、何かご面倒なご用事でもございましたか」
夫の外出は、藩主奥平（中津）家上屋敷の小納戸からの呼び出しだったので、夫人には多少気掛りになっていたのだ。
「いや、なに、大した用事でもなかった」と、福沢は夫人の注いで出した茶にまず咽喉をうるおしながら「今頃、何を思ったか、御紋服をくれたのさ」
「私はまた、お呼び出しというから、叱られる事でもあるかと心配していましたのに、それは結構でございました」
と、いいはしたが、しかし夫人の眼は不審そうに、夫の身辺を追求していた。御拝領の品がその手に持たれている様子がないのを訝ったのだ。
「して、その御紋服はいかがなされました」
「うん、それか。そりゃ欲しがる者があったから売って来たよ」
「売って？」
「うん」
「どこへ、どなたに？」
福沢は、夫人がひどくあっけにとられているのを興あり気に、ニコニコして、
「それ、勤番長屋に居たろうがな、菅沼孫右衛門というのが……」
「はい、亡くなられたお兄さんの、ご懇意にしておられましたあの方でしょう」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「そうそう、あそこへな、帰りにちょっと、寄ったんだ。そうしたら出入の呉服屋か、それとも古着屋か知らんが、とにかく、手代のような奴が来ている。聞いて見ると、羽織をこさえようという話なんだな」
「では、その孫右衛門様にお売りになったのでございますか」
「それよ。——わしはその時いってやったのさ、それには、いい縮緬の売物があるが、お買いなさらんか、とな」
「まあ、お話のお早いこと。……そうしたら」
「それは耳寄りな話だが紋所はと念を押す。
——紋所は、御紋付だから誰にでも着られる。
と、わしはいった。
——そりゃなおさら望むところだ。そんな売物があるなら、早く現品を見たいものだ。
——買うといいなさるんなら、見せて進ぜよう。実はここに持っているんだ。この羽織じゃ、どうだ。
と、わしは包を開いて見せてやった。
——なる程、こりゃご紋付だ。手を入れんでもすぐにでも着られるから、早速、買おう。値段は？
——値は、さいわい、ここに呉服屋さんが居なさる事だ。それに踏んで貰おう。
といって、値を付けさせたら、まあ単衣羽織だから、一両三分がいい所だという。結構だと、

その場で手放して来た」
「まあ」
ただし夫人のその一語は、夫の簡単なさばきぶりを感嘆するのとも、あきれるのとも、あるいは自分が一目も見ないで、人手に渡された拝領物を惜しむのとも、わからない返事であった。

二

「ところで、この金だがね」
「はあ」
「お前の方で大して入用でないのなら、わしが使いたい」
「どうぞ。――あ、そうそう、つい申し遅れておりました。お留守中に、尚古堂が参ったのでございます」
「何しに」
「こないだの『西洋事情』がまた重版になったからと申しまして、その部合を届けて参りました」
「なかなか売れるなあ。まあ、よかった、よかった。いくら、その金は？」
「みんなで四両二分でございます。ただいま、お目に掛けましょう」
「いや、いいよ、いいよ。では、それはお前の方で使っていいから、御紋服の一両三分は、そん

なら、わしの財布に入れとくよ」

福沢が勝手元を心配するは、去年の暮にこの屋敷（芝・新銭座）を買い、そこへこの住居は鉄砲洲から移して来たばかりだし、その上に自分の開いている学塾の、寄宿舎と講堂と、その頃としてはまさに江戸一番の「宏壮な」ものの普請中だったので、福沢家も少々金が手詰りになっていた。一両とまとまると、やっぱり夫人の意向を一応は聞いて見なければならない理由はそこにあった。

「でも、珍しうございますね。あなたがわざわざこの金は自分で使うなどとおっしゃるのは」

「それか。実は、わしは明日、ちょっと、馬で横浜まで行って来ようと思う」

「浜へ……何しに？」

「お納戸がかりの呼び出しがなかったら、本当は今日にも行きたいと思っていたところだ。それ、今朝ほど、波止場飛脚が着いたろう」

「ああ、アメリカの荷物とかいう」

「それそれ。あれを渡してくれるというから、行って貰ってこよう」

「だって」

と、夫人は、それには反対であった。「それこそ、誰か塾の者でも代人にお遣りになりましたら？」

「どうして」

「ご道中が危くはございません？」

「自分が行けない程の所へ、塾の書生ならなおさらやれるもんか。なに、別に、どうって事はないんだよ。官軍は江戸へ迫って来たって、意外におとなしいじゃないか。品川の宿場でこそ随分、騒ぎも荒れもするらしいが、上からのいいつけが厳しいと見えて、関係のないこちとらには、何の仇もせん。大丈夫という見究めがついとりゃこそ行くんだ。危かったら、何が出かけるもんか。わしが臆病で、怖がりなのは、お前もよう知っとるじゃないか」

こういって、やっと夫人を説きつけた。

いつの間にか行燈に灯が入った。増上寺では暮れ六つが鳴りはじめた。

福沢は今日は、普請場を一度も監督しに行かなかった事を思い出して、提灯をつけて庭へ出て見た。もし大工が、火の後始末でも悪いと、せっかく出来上がるばかりになった塾舎が灰になるのを福沢は恐れたのであった。

外は、長い春日だから、さすがにまだ西の空から薄明りがさしていて薩摩屋敷の焼跡あたりからは、剣でも鍛えているような鋭い雉子の声が響いてくる。今日の鳴き納めであろう。

東の空には十五夜を明日に控えた満月が、鮮やかな登場ぶりを見せている。春宵には習いの、肌になま温い、粘っこいような風が、しきりに桜の花をこぼして来るのは、近くにあるあの江川邸の塩釜の八重であろう。

福沢諭吉はその花吹雪の中に暫く立ちつくした。

彼は今、感慨無量なのだ。

三

考えてみると、塾をここまでに仕上げてくるのは容易な事ではなかった。
それは学者の仕事というよりも、一つの戦いであった。
時勢との戦いであった。
封建との戦いであった。
社会的制度や慣習との戦いであった。
また、社会的無知と、暗愚に対する戦いでもあった。
早い話が、今日の、ただ羽織一着の処置でもそれだ。
本来なら、御紋服を拝領するなどという事は、藩士として無上の光栄なのだ。その栄誉を末代まで伝えるために、拝領の年月日は、朱で、系図に書き入れまでしたものだ。
それをその場で一両三分の金に代えてしまうなどという事は、世間並からいえばけしからん忘恩の徒だ。でなければ畸人の奇行と見えるかも知れぬ。
だが福沢の腹の中では、それはやっぱり偶像破壊の、戦いの気持に外ならないのだ。
いわんや、この敷地、仕上げに間もないこの塾舎、この講堂。——考えて見ると戦い取ったのでないものが、どこぞにただの一つでもあるか。
この塾は元は、鉄砲洲の、中津の藩屋敷にあったものだ。それが居留異人を住まわせる埋立地

になるというので、立ちのかねばならなくなった。
その時、たまたま、この芝、新銭座の有馬家の邸が売物に出ているという話を聞いた。そこで福沢が初めての米国行の時の軍艦奉行でその後懇意になった芥舟木村毅（また喜毅ともいう）の用人なる大橋栄次を仲介にして買い入れる事になった。
地面は四百三十坪で、値段は三百五十両。支払は旧臘二十五日ということで、約束ができたのであった。
福沢はその日になると、小判を風呂敷に包んで、大橋へ届けた。
しかしその日、そしてちょうどその時刻は、わざわざ福沢に試練の機会を与えようとする天意ででもあるかのように、酒井家の数人が、ごく近くにある薩摩邸を襲って、焼打をかけている最中であった。けたたましは響きは、対座している二人の耳朶まで落ちて来た。
「あれだ。……この物騒のご時勢だからな。江戸の邸という邸、一文だって値なんぞ、あるもんじゃない」
と、大橋は福沢の用向きを聞くと、小判の風呂敷包みはそれとなく押し返した。
「こんな騒動が起こっておろうとはちっとも知らなんだ。なるほど、どうも容易ならん時勢だが、しかしそれはそれとして、この金はな、約束だから先方へ渡して貰わんと困る」
「途方もない。それに約束、約束といいなさるが、軽い口約束で、別に契約書を交わしたというわけではないし」
「いや、それが私の気に食わん」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.